

# 野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第206号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 2021年12月21日

オオチドリ



2021. 5.22 石狩浜

撮影者 田中 陽 (札幌市北区)



# も く じ

本州ではなく大陸経由で南下する石狩平野のノビタキ  
 — 北海道の夏鳥はどのように南下してどこで越冬しているのか —  
 森林総合研究所四国支所 山浦 悠一 …………… 2

いしかり調整池 増加するダイサギ  
 — どこから来て、どこに行くか — 札幌市北区 樋口 孝城 …………… 4

十勝・浦幌 バライロムクドリの観察記録  
 道内2例目 2013年に幼鳥、今回は成鳥  
 十勝管内浦幌町 久保 清司 …………… 6

ソリハシセイタカシギとの出会い 北広島市 山本 克博 …………… 7

バードウォッチャーズ・スケッチブック  
 正義の人か交差点か イスカ 札幌市中央区 本間 康裕 …………… 8

野鳥情報コーナー 石狩浜 ヒメウズラシギの観察記録  
 北海道大学理学部 榛沢日菜子 …………… 9

市町村の鳥 小樽市「アオバト」  
 故佐々木勇氏 60年の観察と保護活動で「市の鳥」に  
 札幌市中央区 國本 昌秀 …………… 10

探鳥会ほうこく …………… 13

探鳥会あんない 表紙の鳥 …………… 16

※本誌に掲載する写真のカラー版は、当会ホームページ(<https://aigokai.org>)で閲覧することができます。

## 本州ではなく大陸経由で南下する石狩平野のノビタキ

— 北海道の夏鳥はどのように南下してどこで越冬しているのか —

森林総合研究所四国支所 山浦 悠一

### <減少する草地性鳥類と林業の役割>

10年ほど前、日本全国で行なわれた繁殖期の鳥類調査（全国鳥類繁殖分布調査）の結果を解析しました。その結果、草地性の種類が一般に減少していました（Yamaura et al. 2009）。これは植物や昆虫と同様で、全国的な草地や伐採して植栽間もない林（幼齢林）の減少が原因と考えられました。また野外調査から、幼齢林は野焼きによって維持された伝統的な草地に匹敵する生息地で、林業活動によって草地性生物がある程度保全できると考えられました（Yamaura et al. 2012）。道東の調査では、ホオジロやモズ、ノビタキやビンズイ、オオジシギが幼齢林に生息する代表的な草地性鳥類でした（Yamaura et al. 2016）。そして概ね1ha以上であれば、小面積の複数の幼齢人工林でも、大面積の単一の幼齢人工林でも、幼齢林の保全上の価値は大きく異なることが示されました。



写真1. カラマツ植栽木の梢に止まるノビタキの雄  
十勝管内浦幌町 Yamaura et al. (2016) の図1を転載

しかし、国内で繁殖する多くの草地性鳥類は夏鳥なので、その減少を食い止めるためには国内の対策だけでは不十分です。渡り中継地から越冬地まで明らかにした上で、潜在的な脅威をリストアップする必要があります。特に日本を含めたシベリアからニュージーランドに伸びる南北の区域は「東アジア・オーストラリア・フライウェイ」と呼ばれ、世界の渡り鳥の40%以上が生息する重要地域です。それにもかかわらず、渡り鳥の個体数の根幹を占める小鳥の渡りルートは全く明らかにされていませんでした。

### <ノビタキを捕獲して渡りルートを推定>

幼齢林に生息する種の中でも、ノビタキは植栽木の梢に止まって明瞭な声で囀りよく目立ちます（写真1）。北海道の低地でごく一般的なノビタキは、本州の高原、さらに近縁種はヨーロッパやアフリカまで分布し、その生態が研究されています。このため、ノビタキの渡りルートの解明に意義があると考えました。しかし、国内でノビタキ並みに軽量の小鳥（雄の平均体重は約15g）の渡りを調べている研究者は見当たりませんでした。そこで、2012年の鳥学会で渡りの講演をしていたヘルゴランド鳥類研究所（ドイツ）のF. Bairleinさんに2013年の3月に連絡を取りました。Bairleinさんはカナダのハシグロヒタキがアフリカで越冬したという論文をちょうど発表したところで、同僚のH. Schmaljohannさんを紹介してもらいました。

これに合わせて、ノビタキを捕獲する場所と方法の検討を帯広畜産大学名誉教授の藤巻裕蔵さんと始めました。また、鳥を扱う経験を積むため、森林総研北海道支所にいた川路則友さんの札幌市内でのバンディングに参加させてもらいました（当時私は北海道大学に勤務・札幌市に住んでいました）。なお、ノビタキのような小鳥にはジオロケーターという小型の照度計を搭載したロガー（記録計）を装着し、翌年に帰還個体を再捕獲、ロガーを回収してデータを吸い上げ、はじめて渡りルートが推定できます。5分ごとに記録された照度から日の出と日の入りの時間を求め、緯度と経度を推定します。

そして2013年の繁殖期、ハシグロヒタキの捕獲方法をSchmaljohannさんから教えてもらい、藤巻さんと試行錯誤の末、石狩川河川敷のノビタキの繁殖個体を捕獲することにしました。またハシグロヒタキの手法を参考に、ロガーをランドセルのようにノビタキの背中に装着する器具を設計しました。翌2014年、イギリスのMigrate Technology社からロガーを51個購入し、雌4個体、雄46個体にロガーを装着しました。そして2015年、つくば市の本所に勤務していた私は北海道大学の学生だった先崎理之さんと河村和洋さんに帰還個体の探索を依頼しました。勇んで再捕獲を試みましたが、案の定、警戒心が強くなった帰還個体の捕獲は難易度が10倍に跳ね上がっていました。しかも最初の2個体は足環だけでロガーを背負っておらず、先崎さんと一緒にいたく落胆しました。しかし何とか粘って、双眼鏡で確認した合計14個体の帰還個体を全て捕獲し、12個体からデータを回収・解析しました（Yamaura et al. 2017）。

その結果、繁殖を終えたノビタキは本州を経由せず北海道から直接大陸に渡り、ロシアの沿海地方～中国の黒竜江省東部で一時滞在していました（図1）。ノビタキはその後、中国を経由してインドシナ半島で越冬していました。南下の過程で多くのノビタキが中国東部の低地帯（華北平原）を通過していましたが、この地域では鳥類を大量に捕獲していることが報告されています。また、越冬地となっているインドシナ半島では、これまで焼畑などにより維持されてきた草地が、ゴム農園や恒常的な耕作地へ転換されて減少しています。さらに、灌漑の実施や農薬・肥料の使用量の増加といった農業の集約化により、草地性鳥類の生息地の縮小・劣化が懸念されます。こうした国外の脅威への取り組みも今後重要だと考えられます。

図1. 石狩平野で繁殖したノビタキの渡りルート  
石狩平野から本州を経由せず、ロシア沿海州南部～黒竜江省東部のハンカ湖周辺に直接渡って一時滞在しました。中国東部の低地帯（華北平原）を経由し、中国南部、あるいはインドシナ半島（ラオス、カンボジア、タイ、ベトナム）で越冬していました。越冬地には、草地や農地、森林がモザイク状に入り組んだ景観が広がっています。Yamaura et al. (2017)の図1(a)を和訳・加工して転載

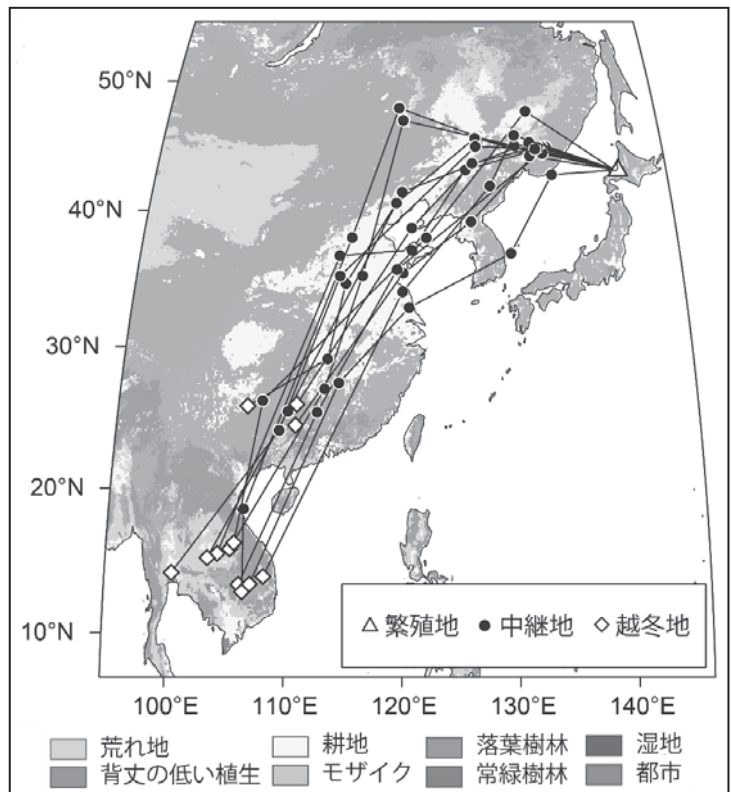
（編集部より）植生の凡例は彩色されています。当会ホームページの「野鳥だより」の「掲載野鳥写真」で、カラー版をご覧ください。

＜本州を経由せずに南下する理由＞

ところで、なぜノビタキは北回りの大陸伝いのルートで南下したのでしょうか？本州の渡り鳥は本州を伝い、四国や九州を経由して南下することが知られています。1万3千年ほど前の最終氷期の北海道は寒冷で乾燥しており、草地が広がっていました。サハリンを通して大陸とつながっており、マンモスをはじめ草地性生物の多くが大陸から渡来してきたとされます。ノビタキなどの草地性鳥類もこの北回りのルートで北海道に定着し、このルートが現在も遺産として残っているのかもしれませんが。あるいは、北回りのルートの方が海上の移動距離が短く、リスクが小さいからかもしれません。草地性鳥類の保全、そしてノビタキの本州個体群や他の種類の渡りルートの解明が期待されます。

引用文献

Yamaura et al. 2009. Does land-use change affect biodiversity dynamics at a macroecological scale? A case study of birds over the past 20 years in Japan. Anim. Conserv. 12, 110-119.  
Yamaura et al. 2012. Biodiversity of man-made open habitats in an underused country. Biodivers. Conserv. 21, 1365-1380.  
Yamaura et al. 2016. Estimating species-area relationships by modeling abundance and frequency subject to incomplete sampling. Ecol. Evol. 6, 4836-4848.  
Yamaura et al. 2017. Tracking the Stejneger's stonechat *Saxicola stejnegeri* along the East Asian-Australian Flyway from Japan via China to Southeast Asia. J. Avian Biol. 48, 197-202.



# いしかり調整池 増加するダイサギ

## — どこから来て、どこに行くか —

札幌市北区 樋口孝城

### <近年いしかり調整池でダイサギが急増>

北海道でダイサギを見ることは1990年代前半ぐらいまではめったになく、見る人を興奮させたものでした。それが1990年代後半ぐらいから北海道のあちこちで飛来目撃が増えてきて、近年は時期や場所によってはかなりのまとまった数で見られるようになってきました。時には「ダイサギしかない」とまで言われることも希ではなくなってきました。どうしてこうなってきたのでしょうか。

石狩市北生振きたおやふるにある「いしかり調整池」(以下調整池)は農業用貯水池として2007年に造られました。春に石狩川から取り入れられて満々と湛えられていた水が8月下旬に抜かれると、浅い水が残る巨大干潟の出現となります。それに合わせてシギ・チドリ類が飛来することから、2013年からは北海道野鳥愛護会の探鳥会実施地になっています。シギ・チドリ類以外にも水鳥たちが訪れ、なかでも近年数多く飛来するようになったダイサギは、時には調整池の主役になります(写真1)。



写真1. いしかり調整池のダイサギ 2021.10.1

調整池ができた時からその季節になると足繁く通っていますが、ダイサギが初めて記録帳に出てきたのはその年2007年の9月16日でした。でも、そこにはダイサギ1と書いてあるだけで、この記録がこの年のすべてでした。

翌2008年秋、シギ・チドリ類やカモ類は前年と同様に随分と来ましたが、ダイサギの記録は皆無でした。2009年10月3日に2年ぶり、私の記録帳では調整池2例目で、この時は2羽でした。当然のことながら当時はこれが普通の状態と思っていました。

2010年からよく見られるようになりました。といっても1羽だけのことが多く、これはおそらく同じ個体が滞在していたと思われます。数羽がだいたい見られるようになったのは2012年からです。その後10羽を超えること

も希ではなくなりました。このあたりでもう“随分”増えてきたという感覚でした。

調整池の水が抜かれてダイサギが来始める8月下旬から、ほとんどいなくなる11月上旬までを旬毎に分けて、その間の1日(1観察時)の最多記録羽数を2012年から年毎に示したものが図1です。

たとえば2021年9月中旬には11日から20日までの間に5回(5日)羽数を数え、70羽ぐらいの日もありましたが、最も多い日が約100羽でした。100羽もいると正確には数えられませんし、中には少数(数羽以下)のチュウサギが含まれますから、 $100 \pm 5$ 羽程度、もしかしたら $100 \pm 10$ 羽ぐらいと捉えてください。それでも全体的な傾向自体は十分に見てとれると思います。

2012年から2018年までのグラフはそれまでの傾向を表すためにあえて年毎の記録を重ね並べています。2015年10月中旬に39羽というやや多い日がありましたが(図中の\*印)、だいたい20羽以下です。とはいえこれでも十分に多いというのは前述のとおりです。

大きく増えてきたのは2019年からです。2018年までに比べると格段に多くなっているのが一目でわかります。2020年は少し減ったのですが、今年2021年は9月、10月の多い時には100羽を超えました。増加を感じ始めてからわずか10年ぐらいのうちにびっくりするほどの増え方です。実はこの増加傾向は調整池に限ったことではありません。北海道各地の野鳥飛来状況などを収集すると、全道的な状況と比較して調整池はむしろ遅れての傾向のようです。ただ、調整池という限られた狭い場所でのことですから、増加傾向が実感されます。

さて、どうしてダイサギがこんなに増えてきたのでしょうか。以下、私なりの仮説です。仮説といっても、こう考えたら話はうまいこと合いそうだという程度のもので

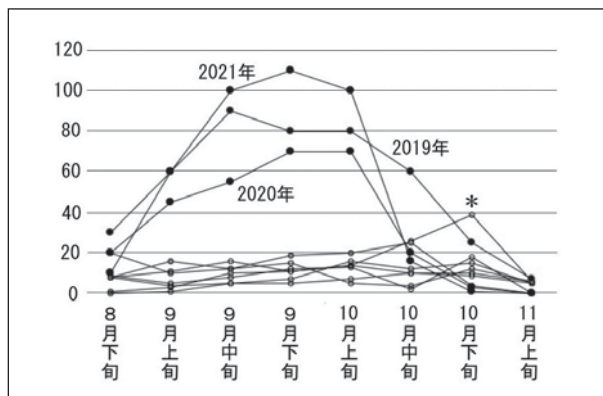


図1. 旬毎の1観察日の最大羽数

＜調整池のダイサギは大陸系の亜種ダイサギ＞

この仮説にはどうしても亜種という分類単位を使わざるを得ません。ダイサギという種には世界的にはいくつかの亜種がいるのですが、日本で見られるものは亜種ダイサギと亜種チュウダイサギの2亜種です。

図2は2つの亜種の繁殖地と越冬地、その間の移動ルート（渡りルート）を極めて簡略に示したものです。毎年の春季、テレビなどでサギ類の集団繁殖に関わる報道がよくあります。だいたい関東以西でのことで、集団繁殖地（いわゆるサギ山）周辺にまき散らされる糞の悪臭や、夜通し聞こえる鳴き声に近隣住民が頭を抱えるという取り上げられ方です。サギ山にはゴイサギ、アオサギ、コサギあたりが多いのですが、ダイサギもいます。このダイサギは亜種チュウダイサギ（本州のダイサギ）で、冬になると一部は残る（越冬する）のですが大部分は東南アジアやもっと遠くの南の地に渡って越冬します（図2A）。春になるとまた戻ってきます。日本で繁殖するもの以外は、中国、東南アジア、さらに南方ではほぼ留鳥です。

かつて春から夏に北海道で見られるダイサギは、この本州のダイサギが何らかの理由で、北海道にまで来てしまったもの（図2Aの点線）という考えが支配的でした。一般的にいう迷行（迷鳥）です。当然のことながらこんな目にあうダイサギの数は少なく、「珍し、珍し」となるわけです。2000年以前の新聞記事には「強風に流されて飛来した迷い鳥では」とか、「本州で繁殖するグループの若い個体が迷ってきたのかもしれない」というような関係者コメントが散見されます。そのうちあちこちで、しかも複数羽が見られるようになると、「生息域が北に拡大しているようで、定着すれば繁殖もありうる」というコメントもありました。本州のダイサギが北海道にまで来るようになったという考えは根強く残っていました。

北海道のダイサギについての考え方の基本が、「本州のダイサギ」から「大陸系のダイサギ」すなわち亜種ダイサギへと変わったのは比較的近年のようです。団体さん？で来たり、越冬個体まで見られたりするようになると、さすがに本州の個体の迷行と考えるのは無理ということになったのでしょう。

日本のダイサギには2つの亜種がいるということ自体はずっと前からわかっていたことですが、その識別が困難です。図鑑的には両亜種は酷似することですが、アオサギに比べて亜種ダイサギは同大かやや大きく、亜種チュウダイサギは小さいという記述がみられます。亜種チュウダイサギは明らかにアオサギより小さいという記述も見られます。調整池のダイサギはアオサギと一緒にいても、大きいやら、小さいやら、どうもわからないということで、亜種ダイサギとみなしていいのではと考えます。両亜種の識別点には冬羽での足の白っぽさ（黄色っぽさ）の部位的違いもあるのですが、絶対的ではないようで

す。ともかくも両亜種の識別が困難とはいえ、大陸系のダイサギ、すなわち亜種ダイサギが北海道のダイサギを考える時にそれほど考慮されなかったのは、私にとってはやや不思議なところでは。

＜亜種ダイサギの北海道渡りルートの利用増加？＞

さてここから亜種ダイサギの繁殖地と越冬地の話に進みます。図2Bには作図上の都合から極東ロシアの沿海地方あたりのところに繁殖地と書き入れています。実際の繁殖地は西側にあるバイカル湖方面、さらにはヨーロッパの方までずっと広い範囲です。秋になると図2Bの範囲ではモンゴル、中国、朝鮮などに渡って越冬します。少数は日本に渡ってきて越冬します。これが本州方面で見られる冬羽の亜種ダイサギです。図2Bでは繁殖地から日本海を横断して直接日本に来るように書いていますが、実際には朝鮮半島を経由して来るのかもしれない。

点線が日本列島経由のルートです。かつてはこのルートを通る個体はわずかだったけれども、近年になって急に増えてきたのではないかというのが大胆な仮説です。道南地方ではだいぶ前から春の渡り時期に数十羽のダイサギの群れが見られることがあるようで、春にも秋にも北海道ルートが開発されたと思われれます。これまでとは違うルートを通るようになったからです。北海道を通る個体数は増えるけれども、日本全体では越冬する個体数自体は増えません。

調整池は周囲を高い塀で囲まれており、また餌となる小魚が豊富です。大陸から来たダイサギは本州の越冬地に渡り始める前に、調整池を一次的滞在地として利用しているのではないのでしょうか。

何がきっかけになって渡りルート変更が起こるかについては私にはさっぱりわかりません。ただ、一旦北海道ルートが利用されると、代々受け継がれる可能性があり、結果として北海道で見られるダイサギが増えてきたのではないのでしょうか。

10月中旬になると調整池以外でも見られていたダイサギは随分と少なくなります。私の頭の中には津軽海峡を渡って本州の越冬地に向かうダイサギの光景が浮かびます。その中には調整池にいたダイサギもいるのではとひそかに思っています。

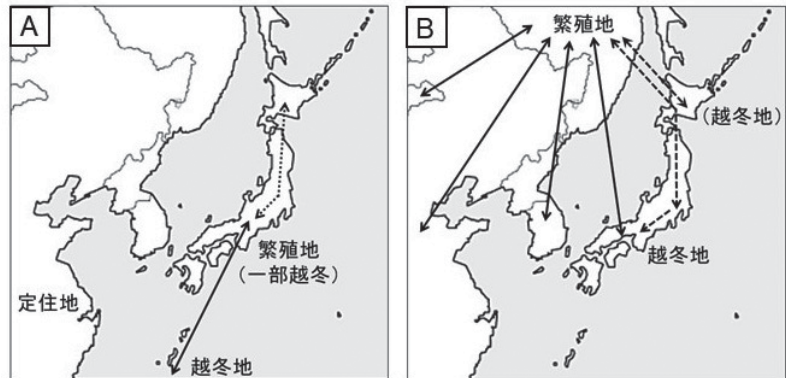


図2. 亜種チュウダイサギ(A)と亜種ダイサギ(B)の繁殖地と越冬地

## 十勝・浦幌 バライロムクドリの観察記録

### 道内2例目 2013年に幼鳥、今回は成鳥

十勝管内浦幌町 久保清司

2021年8月19日。そろそろ毎年観察しているホシムクドリでも現れないかと、ムクドリの群れを求めて浦幌町養老へ差し掛かったところ、早速100羽ほどの群れが草地から飛んで電線に止まりました。国道336号の取り付け道路に車を止めて探してみると、白黒模様がカササギによく似た鳥が1羽交じっています(写真1、2)。大きさはムクドリと同じ位ですので、カササギではありません。今までに見たことがない鳥です。距離はありましたが、とりあえず証拠写真の撮影をした後、早速手持ちの図鑑(フィールドガイド日本の野鳥)を確認しましたがよく分かりません。ムクドリの群れは草地に下りたり、オオイトドリや灌木に移動しながら採餌をしては近くの電線に止まります。



写真1. ムクドリと一緒に行動するバライロムクドリ  
2021.8.19 浦幌町養老

車を移動させながら問題の鳥を何とか近距離で何枚か撮影することができました。あらためて違う図鑑(日本の野鳥650 平凡社)も見ながら、ムクドリと一緒に行動しているので、ムクドリの仲間なのは間違いないと判断しました。ムクドリの仲間ならバライロムクドリかな?でもバライロムクドリなら腹や背中の中の羽の色は白色でなく桃色で、嘴や足の色はもっと桃色が濃くはならず、それでも頭、胸、翼、尾、下尾筒などの黒色という羽の配色から、バライロムクドリに間違いはないようです。

帰宅後パソコンで改めて写真を拡大してみると、白色に見えた腹や背中のはうっすらと桃色がかっています。嘴の色も足の色も図鑑に書かれている内容より少し薄いと感じますが、バライロムクドリ成鳥以外の種とは考えられないと確信しました。



写真2. バライロムクドリ 2021.8.19 浦幌町養老

インターネットでバライロムクドリの画像を検索してみると、図鑑に載っているような腹や背中の中の羽が桃色の個体はほとんどいません。ほとんどが白色に近いのです。桃色が濃く現れるのは繁殖期だけなのかもしれません。

バライロムクドリの観察は、私が調べた限り道内2例目のようです。1例目は2013年9月26日浦幌町豊北でムクドリ50羽ほどの群れの中で、私が観察した幼鳥です(写真3)。この時は、ムクドリより少し小型で、翼は少し濃いですが他は薄い褐色で、嘴は黄褐色、足の色は桃褐色であることから、コムクドリ幼鳥とも異なる、ちょっと違ったムクドリがいると数枚の写真に収めました。



写真3. バライロムクドリ幼鳥 2013.9.26 浦幌町豊北

鳥仲間で見えた岩田好孝・敦子夫妻から、九州で観察したバライロムクドリ幼鳥と特徴が同じだと連絡をいただきました。今回の成鳥が前回の幼鳥が成長して現れたものか、それとも8年も経過しているのでは別個体なのか、中近東やインド方面に生息するバライロムクドリがどのようなルートをたどって浦幌へたどり着いたのか。浦幌で観察されているギンムクドリもなぜ他の地域ではあまり観察されないのか。浦幌で迷鳥が次々と観察されるのは特別な渡りルートがあるためなのか、謎は深まるばかりです。



## バードウォッチャーズ・スケッチブック

# 正義の人か交差点か イスカ

札幌市中央区 本間 康裕

最近、テレビを見ていて、若者言葉がわからんです。言い回しだけじゃなくて、5Gとか、アプリとか、意味もわからない。こんなことじゃ、若者と話をする機会があってもチンプンカンプン、話がかみ合わず、「鶉(いすか)の嘴(はし)の食い違い」(ものごとが食い違うことの例え)だろうな、と思っていました。ところがイスカをテーマにした2019年12月の「野鳥お勉強会」(居酒屋での自然関係学習会)で「最近はこのことわざを知らない若い人が増えました」と、話題になりました。そうか、本当に鶉の嘴の食い違いなのだ。世代ギャップは恐ろしいなあ。



赤い雄のイスカ  
2018.4.16 札幌・円山公園

しかし、ことわざになるぐらい、イスカといえば、その嘴(くちばし)が特徴的(上下が食い違っている)なのですが、昔の人(江戸から明治、大正ぐらいまでの人を想定しています)は、よく気が付いたものだと感心してしまいます。私など、冬場に赤い鳥を見かけても、双眼鏡でようやく嘴を見て、「ああ、イスカだ」と判別する始末。写真も望遠鏡もない、あっても普及していないところに、多くの人が「イスカといえばあの嘴」と、理解していたのには驚くばかり。きっと、捕えては飼ったり、食べたりしていて、身近だったのでしょうか？

その嘴は松かさをこじ開けて実を食べるのに適した形なのだそうです。たしかに松の実おいしい。中華料理だけでなく、ウイスキーのつまみにもなる。いやいや本来はイスカがどういふふう松かさをこじ開けるかを説明しなければならぬのですが、私の文章力では無理です。気になる方はネットで動画を検索してください。



緑色の雌のイスカ  
2018.5.7 札幌・前田森林公園

さて、その特徴ある形は、キリスト教圏では、イスカが、はりつけにされたイエス・キリストさまの釘を抜こうとして曲ってしまったと言いつたといわれているそうです。これは北海道野鳥愛護会のHPのPhoto Album「2020年度 野鳥写真展」のイスカの写真に出ていました。そしてイスカは「義人の象徴」だとか。

義人？ あんまり、ピンときません。正義の人、義理の人ということでしょうか。でも、「義民」なら聞いたことがあります。「義民佐倉惣五郎(宗吾)」ですね。江戸時代、今の千葉県にあたる下総の佐倉にいた百姓(実在しなかったとの説もある)で、以下、歴史学者、和歌森太郎さんの本(「日本史の巷説と実説」河出文庫)をつまみ食いすると… 彼は佐倉宗吾とも木内宗五郎とも呼ばれ、領主、堀田正信の圧政に耐えかねて、百姓を代表して将軍に直訴します。その結果、正信は謹慎、のちに自害。ところが一方の宗吾も「直訴は不届きだ」として、はりつけに。子供ら4人は打ち首になり佐倉389カ村の百姓衆の涙を誘う～そう、キリストさまとははりつけつながりなんですね。

話のはりつけに戻ったところで、イスカの英名はコモン・クロスビル。コモンは顧問じゃなくて一般的なこと。クロスビルはその名の通り、交差したビル(くちばし)。そのままといえば、そのままの名前。でもクロスには十字架という意味もあるから英語圏の人はイスカの名前をきいてキリストさまを思い浮かべるのかもしれないな。

# 野鳥 情報コーナー

## 石狩浜 ヒメウズラシギの観察記録 北海道大学理学部3年 榛沢日菜子



黄色いイスカの幼鳥？  
2020.1.28 札幌・真駒内公園

ところで、絵に描いたのは赤い雄が2018年4月16日、札幌市の円山公園、緑色の雌が同年5月7日、前田森林公園（この17年から18年春にかけて、札幌市内はイスカの当たり年で、どこに行ってもイスカだらけでした）。一方、黄色い幼鳥（と思われる）が2020年1月28日、真駒内公園のもの。

円山公園ではヨーロッパカラマツの枝にいました。この木は日本のカラマツと違うらしいのですが、どこが違うかよくわかりません（木につけられたプレートで種名がわかった）。前田森林公園ではシラカバ林にいたので虫を食べていたのかもしれませんが。

さて、この赤、青（緑）、黄色のイスカ、カメラマンの中には1枚の写真に3種一緒に収めたいと狙う人もいます。そうか、赤青黄といえば交通信号。信号機が立っているのはたいてい交差点（クロスロード）。イスカとクロスはここでもつながりました。

そして最後になってしまいました。学名の解説。イスカは *Loxia curvirostra*（ロキシア・カルビロストラ）です。属名 *Loxia* はギリシア語起原で「交差した」という意味。種小名 *curvirostra* は「曲がった嘴」（ラテン語由来らしいが、私にはよくわからない）。うーん、これはそのままの命名で、わかりやすいというか、面白みがないというか…

ついでに和名イスカのいわれもひも解いてみましょう。毎度おなじみ「図説日本鳥名由来辞典」には、「語源は大言海（大槻文彦先生著の国語辞書）によると、いすかし（ねじけている）からでている」とあります。「いすかし」とは初めて聞く言葉ですが、「俚」という字を書いて「いすか」と読ませています。これも特徴ある嘴を指し示していて、そのままといえばそのままです。なお同辞典は、さらに続けて、雄を「あかすか」、雌を「きすか」または「みどりすか」というのは体色のためであろうと書いています。交通信号機がなかった昔の人もイスカの色は「赤」「黄」「緑」と認識していたようです。（イラスト筆者）

（編集部より）イスカの色については、当会ホームページの「野鳥だより」の「掲載野鳥写真」で、カラー版をご覧ください。



ヒメウズラシギ 2021.9.2 石狩浜

2021年9月2日から9日にかけて、石狩湾新港東埠頭東側の石狩浜でヒメウズラシギ幼鳥1羽を観察しました。2日の午前6時ごろ、トウネン5羽の群れの他に、トウネンよりわずかに大きいシギのシルエットが見えました。近づいて観察してみるとそれは私が見たことがなく、かついつか見てみたいと思っていたシギでした。尾先より顕著に突出した初列風切と、上面の暗褐色の軸斑とバフ白色の羽縁により上面が鱗状に見えたことから、ヒメウズラシギの幼鳥であると同定しました。

最初に発見した時は、トウネン5羽の群れから少し離れたところで採餌をしていましたが、4日に観察した時は単独で採餌をしていました。9日を最後に目撃情報がないので、この日が終認日だと考えられます。

ヒメウズラシギは、アラスカとカナダの北極海沿岸、ロシアのチュコト半島西部、グリーンランド西部で繁殖し、南アメリカ大陸で越冬するため、日本では希な旅鳥とされています。

北海道では2012年時点で少なくとも11例が記録されています（藤巻 2012）。この中で、石狩地域においては2006年に石狩浜で記録されています（高橋 2006）。また、石狩鳥報2020（石狩鳥類研究会 2021）によると2008年に当別川、2020年に石狩浜で記録が出ており、石狩地域においては今回の記録は4例目だと考えられます。何日も通い、初認できたことは良い思い出に残りました。共にシギ・チドリ類の観察に通った方々に感謝の意を表します。

### 引用文献

- 藤巻裕蔵 2012. 北海道鳥類目録 改訂4版.
- 高橋良直 2006. 北海道野鳥だより(146):11.
- 石狩鳥類研究会2021. 石狩鳥報2020.

## 市町村の鳥

## 小樽市「アオバト」

# 故佐々木勇氏 60年の観察と保護活動で「市の鳥」に

札幌市中央区 國本昌秀

道内179市町村のホームページを調べたところ、63市町村がシンボルの鳥を定めています。カッコウが札幌など9市町、カモメ類が石狩など8市町、ハクチョウが苫小牧など7市町、アカゲラが名寄など5市町、ヒバリが帯広など4市町村…などです。その選定にはどのような背景があったのか、調べてみようと思いました。今回は、北海道野鳥愛護会草創期の関係者が関わった小樽市のアオバトについてです。

### <海水を飲むアオバトと佐々木勇氏の出会い>

小樽の張碓海岸。毎年5月下旬になると、海を見下ろす断崖の森に本州からアオバトが渡ってきます。そして、ときおり前浜のシンボルである恵比寿島近くの岩礁に下りては、海水を飲みます(写真1、2)。ここは塩分をとるアオバトの興味深い生態が間近に観察できる希少な場所です。小樽市の鳥に定められたのは、1986年(昭和61年)のバードウィークが始まる5月10日。ここに至る道筋には、アオバトに魅せられた故佐々木勇氏の60年近い観察と保護活動がありました。

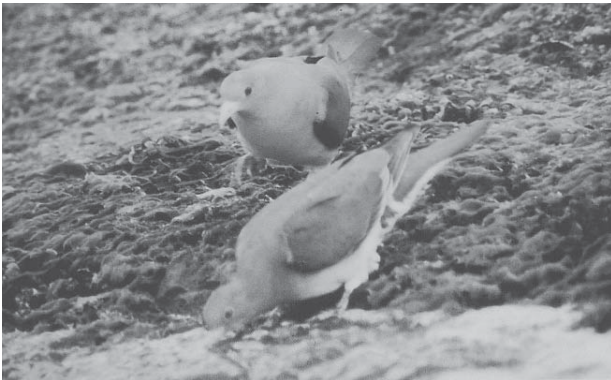


写真1. 張碓海岸で海水を飲むアオバト  
1985年ごろ 岩井直樹さん撮影



写真2. 恵比寿島がシンボルの張碓海岸 アオバトは左端の岩礁(通称アオバト岩)を海水の吸飲に利用してきた

1899年(明治32年)5月生れの佐々木氏が早稲田大学を卒業して小樽に戻ったのは1927年(昭和2年)、27歳の時でした。家業の佐々木鉄砲火薬店に入り、顧客ハンターの手伝いとして全道の猟場を歩きました。さまざまな野鳥が心を揺さぶり、その観察眼が鍛えられます。地元の人が「岩虫を食べている」と言っていたアオバトが、実際には海水を飲んでいることにも気づきます。1928年(昭和3年)夏のことで、この“発見”から佐々木氏のアオバト人生が始まります。

### <日本野鳥の会札幌支部の創設で繋がった人脈>

1939年(昭和14年)7月23日、札幌の豊平館で日本野鳥の会札幌支部の設立総会が開かれ、佐々木氏は会長の中西悟堂と懇意になります。引き合わせたのは、佐々木氏がその8年ほど前から親しくしてきた道庁の狩猟係長、斎藤春雄氏(後に北海道野鳥愛護会副会長、北方鳥類研究所所長)でした。狩猟と鳥獣保護の行政が一体化していた時代の興味深い逸話です。

佐々木氏が札幌支部の蟻川秀夫氏を張碓に案内したのは、第2次大戦中の1942年(昭和17年)夏のことでした。名古屋から転勤してきた蟻川氏は本州ではなかなか見られないアオバトの生態に驚愕し、狩猟の禁止を強く勧めます。当時の生息数は50羽ほどでした。佐々木氏は自身の日本鳥類保護連盟小樽支部長名で道庁に陳情、斎藤狩猟係長の存在もあったことから、張碓海岸は即刻10年間の銃猟禁止地区に指定されます。

翌1943年(昭和18年)、日本野鳥の会の『野鳥』2月号に「海と緑鳩」を寄稿します。会長の中西悟堂の求めによるもので、張碓のアオバトが全国の野鳥ファンに知られることになります。

1947年(昭和22年)に張碓は大火に見舞われます。集落はもちろん、アオバトが使っていた恵比寿島の大木や断崖の森も焼失し、植生の回復までに30年ほどの歳月を要することになります。

### <北海道の鳥獣保護区、そして小樽市の鳥に>

1977年(昭和52年)夏、佐々木氏は張碓のアオバトの生態を録音付きカラーフィルム30分にまとめて、日本野鳥の会全国支部長会議で上映します。後日、この映像を見た山階鳥類研究所長の山階芳麿博士が鳥獣保護区指定の重要性を指摘します。

佐々木氏が日本野鳥の会小樽支部長として陳情した結果、1979年(昭和54年)10月に張碓のアオバト生息地が北海道の鳥獣保護区に指定されます。

さらに佐々木氏はアオバトを小樽市の鳥に指定することを1980年(昭和55年)から4年間で市に3回、市議会に1回と陳情を重ねます。この間、日本野鳥の会本部の

視察や陳情、そして本格的な生息調査が行われ、1983年（昭和58年）の生息数は200羽であることが確認されます。1985年（昭和60年）4月、佐々木勇氏は86歳で亡くなりますが、アオバトが小樽市の鳥に指定されたのは、その翌年の5月のことでした。

アオバトが小樽市の鳥に指定されるまでの経緯を書いてきましたが、出典は佐々木氏の著書『あおばと』（写真3）です。アオバト研究に関する遺稿を長男の宏氏がまとめて、死後3ヵ月後に発刊されたものです。



写真3. 佐々木勇氏の著作『あおばと』

佐々木氏は晩年、脳梗塞の後遺症で車いす生活を余儀なくされました。孫のいく子氏によると、小樽市への陳情は宏氏の夫人が車いすを押し出向き、『あおばと』の原稿も不自由な体をおして執筆していたということです。

#### ＜アオバトを意味するアイヌ語地名が今も＞

アオバトが古くから張碓海岸周辺を生息地としてきたことは、地名からも明らかです。

「ワーオ、ワーオ」と鳴くアオバトをアイヌの人たちは「ワウ」と呼んでいました。張碓の隣りに、かつては和宇尻（ワウシリ）という集落がありました。アオバトの棲むところという意味です。恵比寿島のアイヌ語名もワウシリ。シリは場所とか島を意味します。今は市道の名称として和宇尻中央通線が残っています。また、国道5号線を挟んだ山側に標高856mの和宇尻山があります。

#### ＜市民生活とアオバト＞

アオバトが市の鳥として生活のそばに“居る”事象を探してみました。

市立小樽図書館のキャラクター「たるばとちゃん」（写真4）はアオバトです。2016年（平成28年）10月、設立100周年の際に市内の小中高校生から公募しました。214点の応募の中から、市民の人気投票を経て誕生したもので、図書館のホームページには「抜群のバランス感覚で頭の上の本は落としません」と紹介されています。

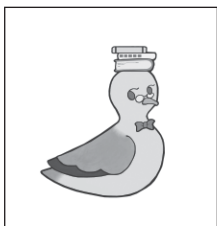


写真4. 市立小樽図書館の「たるばとちゃん」

小樽商科大学の研究者学術成果データベース「Barrel」（英語で樽という意味）のキャラクターは「あおばとちゃん」。留学生に日本語を教えている団体名が「アオバト」です。

大学近くの森には、小樽の探鳥地である標高190mの旭展望台があります。市内と石狩湾を見渡す景勝地で、今年新しくなった木彫看板にはアオバトが彫られています（写真5）。

SNS映えスポット「OTARU PHOTO FRAME」（写真6）も、今年から登場しました。記念写真用のフレームの前に立つと、アクリル板にデザインされたアオバトを顔の周りや手に寄せた記念写真が撮れます。



写真5. アオバトが描かれている旭展望台の木彫看板



写真6. 記念撮影用のフレームにもアオバト

張碓海岸に近い張碓小学校の創立は1876年（明治9年）の張碓教育所に遡ります。1955年（昭和30年）に制定された校章（写真7）はアオバトがメインで、総合学習の時間を「あおばと学習」と名付けて授業を行っています。

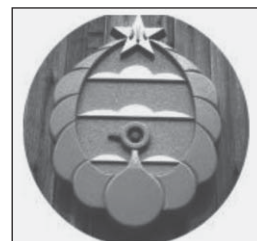


写真7. 張碓小学校の校章

2016年（平成28年）11月の開校140周年式典の校長式辞を紹介します。「アオバトのように歴史と伝統のある本校

で学んだことを誇りにして羽ばたき、もし辛くなったときは、アオバトが故郷の海水を飲みに戻るように母校や故郷を訪ねて下さい」(要旨)。張碓という地域を語るときにアオバトの存在が欠かせないことがわかります。

張碓の住宅地のはずれ、恵比寿島を見下ろす崖のそばにアオバトを詠んだ句碑(写真8)があります。建立は市の鳥に指定された翌年の1987年(昭和62年)です。

### 青鳩や礁<sup>いくり</sup>つづきに小樽港

勝又木風雨

礁(いくり)はアオバトが下りて海水を飲む岩礁のこと。その先には小樽港、高島岬、祝津岬に連なる大きな景色が広がっています。そういえば、小樽港から祝津やオタモイを周遊する小樽海上観光船は「あおばと」です。白い船体にアオバトの色の特徴である緑、赤紫、黄が彩色され、マリンプルーを滑走するその姿は、まさにアオバトを彷彿させるものです。



写真8. 小樽市張碓町にあるアオバトの句碑

### <張碓海岸とアオバトの今は>

1990年代まで張碓海岸にはJR張碓駅と海水浴場があり、日盛りの夏を楽しむ人たちの周りをアオバトが飛んでいました。(写真9、10)。今はその駅も海水浴場も廃止され、前浜に続く通路も閉じられています。こうした中、日本野鳥の会小樽支部では地元の人が使う迂回ルートを利用して毎年8月に探鳥会を実施してきました。

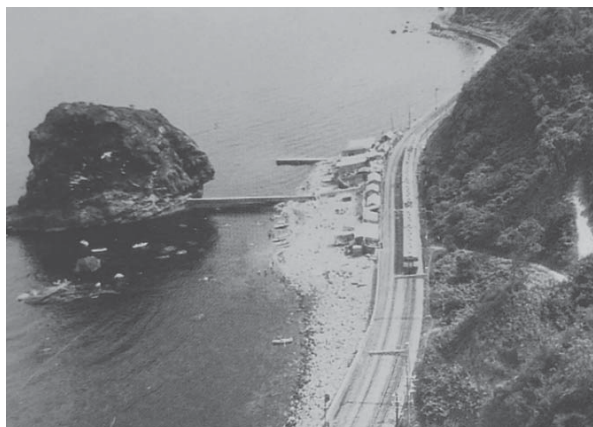


写真9. 張碓海岸 かつてはJR駅と海水浴場があった  
1985年8月 梅木賢俊さん撮影



写真10. 張碓海岸の海水浴客とアオバト  
1985年8月 梅木賢俊さん撮影

小樽市在住で北海道野鳥愛護会会員、日本野鳥の会小樽支部の梅木賢俊氏によると、10年ほど前からアオバトはこれまで使ってきた岩礁(写真2)に下りなくなり、別の場所で海水を飲んでいました。理由はわかっていません。

この2年間は新型コロナウイルス感染症の影響で日本野鳥の会小樽支部の探鳥会も中止されていることから、最近の生息状況もよくわかっていません。

それでも、夏鳥の季節になるとJR列車の車窓からは、飛翔するアオバトの姿を望むことができます。定期的な観察が再開されて、アオバトの今を知りたいところです。

先述しましたが、佐々木勇氏(写真11)は後に北海道野鳥愛護会副会長となる道職員だった斎藤春雄氏と親交がありました。1970年(昭和45年)発行の北海道野鳥だより第1号を見返したところ、設立発起人の一人に小樽の佐々木勇と、その名がありました。当会草創期の先達が在野のアオバト研究と保護活動の中心にいました。



写真11. 佐々木勇氏

佐々木氏は「張碓海岸アオバト生息地」の天然記念物指定について、1950年(昭和25年)5月に小樽市、1981年(昭和56年)12月に北海道教育委員会に陳情しています。アオバトに魅せられた佐々木氏のゴールが、生息地の自然環境を含めた継承であったことを最後に記します。

.....  
(編集部より)「市町村の鳥」は随時、掲載します。市町村の鳥について会員の皆さんが知っているエピソード(指定の経緯・背景、街で見られる鳥の名前やデザインなど)がありましたら、情報をお寄せください。



新型コロナウイルス感染症の影響で4月から半年間中止となってきた探鳥会は10月2日の「いしかり調整池」から、感染防止対策を行いながら再開しました。中止となった探鳥会については、中止の周知活動を行った幹事による状況報告と参考記録を掲載します。

## 鶴川河口

2021. 8. 29

新型コロナウイルス感染症の影響で中止

【幹事による状況報告】人工干潟に行く途中、ノビタキがあちこちに見られました。草原の奥には、アオサギ4羽、人工干潟の杭にはカワセミも止まっています。潮が満ちている時間帯で、シギ・チドリ類の姿は見られず、チュウシャクシギの鳴き声だけが聞こえました。トウネン7羽が通過していった海岸線では、メダイチドリが水たまりの傍に下りてきました。

【参考記録】 マガモ、ウミウ、アオサギ、ダイサギ、メダイチドリ、チュウシャクシギ、トウネン、ウミネコ、オオセグロカモメ、トビ、カワセミ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ノビタキ、スズメ、カワラヒワ

以上17種

## いしかり調整池

2021. 9. 5

新型コロナウイルス感染症の影響で中止

【幹事による状況報告】トウネン、オジロトウネン、ヒバリシギ、キリアイ、コチドリといった小形の種が多く、他にタシギ、タカブシギ、イソシギがそれぞれ1~2羽観察されました。ハヤブサも現れて水鳥たちを慌てさせ、ここならではの光景が見られました。

【参考記録】 マガモ、カンムリカイツブリ、キジバト、アオサギ、ダイサギ、チュウサギ、コチドリ、タシギ、タカブシギ、イソシギ、トウネン、オジロトウネン、ヒバリシギ、キリアイ、トビ、ハイタカ、アカゲラ、ハヤブサ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ハクセキレイ、カワラヒワ 以上26種

## 野幌森林公園

2021. 9. 12

新型コロナウイルス感染症の影響で中止

【幹事による状況報告】子育てが終わり、夏鳥が渡りを始めるころ。鳥の姿を見つけるのは難しい時期ですが、秋の草花を観察しながら、静かな森を歩きました。志文別線に入り、ようやくカラ類の混群に出会うことができ、さらにエナガやメジロの群れも。大沢の池では、オシドリ、マガモ、カイツブリのほか、アオサギやオオバンなども見られました。

【参考記録】 オシドリ、マガモ、カルガモ、キンクロハジロ、カイツブリ、キジバト、アオサギ、オオバン、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、エナガ、メジロ、ゴジュウカラ、カワラヒワ 以上20種

## 宮島沼

2021. 9. 26

新型コロナウイルス感染症の影響で中止

【幹事による状況報告】秋晴れに恵まれ、風もなく、ガンを見るには好条件がそろった日となりました。朝、餌場で採餌したマガンは、次々と沼にもどってきて、1万羽を超える数となりました。ヒシクイ、シジュウカラガンも確認できました。ほかに10種のカモ類、4種のカイツブリ類、4種の猛禽類なども確認できました。

【参考記録】 ヒシクイ、マガン、シジュウカラガン、ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、トモエガモ、コガモ、キンクロハジロ、スズガモ、ミコアイサ、カイツブリ、カンムリカイツブリ、ミミカイツブリ、ハジロカイツブリ、アオサギ、ダイサギ、トビ、オジロワシ、チュウビ、ノスリ、アカゲラ、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒバリ、ムクドリ、スズメ、カワラヒワ、アオジ 以上31種

## 2021年度初 半年ぶりに探鳥会を再開

### いしかり調整池

2021. 10. 2

札幌市北区 新城 久

午前9時30分、探鳥会開始時刻前にいたシギ類すべてのツルシギ6羽、コアオアシシギ1羽が見えなくなっていました。シギ・チドリ類の探鳥会なのに、幹事としてこの先どうしようかと不安でしたが、とりあえず常連のサギ類から見ることにしました。

たくさんいるアオサギとダイサギに加えてチュウサギとコサギもいるはずですが、まずは紛らわしいダイサギとチュウサギから望遠鏡で見えていきます。

チュウサギは単独で見るとなかなか難しいようですが、望遠鏡の中にダイサギと同時に見ると、ダイサギとの微妙



オグロシギとツルシギ 早坂泰夫さん撮影

な違いが見えてきます。最初のうちは、違いがはっきりとは判らなくてもあまり気にしないで見ていた方がいいかもしれません。そのうち、自分で見たその時の印象や、自分なりに覚えた見分け方など、後々役立つことも出てくるので大切にしたいです。

サギ類を観察中、いつの間にかツルシギとコアオアシシギが戻っていました。シギ類の識別ポイントなどは?と聞かれると自分では相当怪しいので、広げたハンドブックと動き回るシギを代わる代わる覗きながら、「ほれこのところ、ここがこうだから」とか言って、あれはツルシギだ、これはコアオアシシギだとかと、近くにいるメンバーでなんとなく納得しています。

最近では、実はずっと前からですが、喉まで出かかっている鳥名が目と口を閉じて5秒経っても出てきません。これを加齢のせいにして言い訳にしています。単独の鳥見も自由なところがあって楽しいですが、探鳥会などで鳥談義をしながらの野鳥観察もまた楽しく、自分を成長させてくれるいい機会です。

新型コロナウイルス感染症第5波の緊急事態解除後2日目の探鳥会でしたが、鳥を見る人たちの中にはコロナに関係なく夜明け前から車を走らせて、月22回もいしかり調整池に通うスーパーレディもいました。

解除後にやりたいことの本音は、居酒屋で冷たい生ビールジョッキを片手に、鳥に乾杯!



当会が整備した花壇と再開された探鳥会

【記録された鳥】 マガン、オナガガモ、キジバト、アオサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、タシギ、オグロシギ、ツルシギ、コアオアシシギ、トビ、アカゲラ、モズ、ハシブトガラス、ヒバリ、ハクセキレイ、カワラヒワ

以上18種

【参加者】 阿部真美、石塚 肇・鈴子、今村三枝子、大西智子、小笠原美紀・由美、鎌田要子、木内勝敏、栗林宏三、小島敏行、小谷内久江、近藤章子、齋藤和夫、齋藤潤太郎・律子、新城 久、田中 陽・雅子、辻 雅司・方子、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城、保科泰典、横山加奈子、吉田慶子

以上27名

【担当幹事】 新城 久、樋口孝城

## 野 幌 森 林 公 園

2021. 10. 10

札幌市中央区 河合千賀子



41名が距離を確保して3班に分かれて行動

野幌森林公園での探鳥会に初参加しました。冬鳥の到来が本格的ではない時期で、多くの野鳥を観察できないかもしれないとの愛護会の方のご説明通り、前半はカラ類やアカゲラ・コゲラの姿しか確認する事ができず少しがっかりしておりました。

その後、遠くの高い木にコクワの実がたわわに実っていて、そこにメジロが数羽やってきていました。コクワは年老いた母の大好物。毎年、秋になると知人が「また1年これで元気に過ごせるね」と、母のために山から採ってきてくれます。今年もコクワを持ってきてくれたと聞いたばかりでした。野鳥たちもこの実を食べて南に渡り、また来年元気に戻ってきてほしいと感じました。

この日一番印象に残っているのは、アオバトを観察できた事です。愛護会の方に見つけていただければ、全く気がつかずにいたことでしょう。本当に感謝致します。アオバトをじっくりと下から観察でき、下尾筒の黒褐色の縦斑を確認できました。

来年はアオバトが海岸へ現れて海水を飲む姿が見たい、またフクロウのヒナの巣立ちの様子をお聞きし、いつかの瞬間に出会いたいと夢が膨らみます。



アオバト 早坂泰夫さん撮影

コロナ禍で久しぶりの探鳥会への参加。皆さんと「ほら、あそこの木に止まっている」などと会話をしながら野鳥観察ができる楽しさ・嬉しさを、公園を歩きながらしみじみと感じました。コロナ禍前は当たり前に来ていた事ができない今。観察できた野鳥数は決して多くはなかったのですが、参加された方々と一緒に野鳥や草花を観察しながら公園を歩く事ができ、たまっていたストレスが解消できた素晴らしい1日となりました。

会を主催されている愛護会の方々に心から感謝致します。そして、この感想文が掲載される頃もコロナ感染が拡大していなく、探鳥会が開催されている事を心よりお祈りしております。

【記録された鳥】 マガモ、コガモ、キンクロハジロ、カイツブリ、アオバト、ダイサギ、コゲラ、アカゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ヤブサメ、メジロ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ 以上19種

【参加者】 青木あけみ、阿部真美、阿部美子、石塚 肇、今村三枝子、大西智子、小原正徳、鎌田要子、河合千賀子、木内勝敏、小谷内久江、今 善三郎、齋藤和夫、佐賀テエ子、高橋貞夫、田中 陽・雅子、辻 雅司・方子、道場 優、徳田恵美、長瀬真央・裕美、畑 正輔、早坂泰夫、福島 文、藤澤邦子、藤原清美、辺見敦子、保坂利江、松原寛直・敏子、丸勢文現・亜希子、南 貴和子、元谷千鶴子、横山加奈子、吉見孝夫・紫乃、渡辺 実・明子 以上41名

【担当幹事】 道場 優、畑 正輔

**測 量 山 唐 松 平**  
2021. 10. 17

霰交じりの雨と強風で中止

探鳥担当幹事より下見時のクマタカ観察が寄せられました。

まだ夏の暑さが残る10月2日に測量山で確認できたクマタカについて報告します。それは、絶好のホークウオッチング日和であった当日昼下がりのことでした。山頂広場では数名のバードウォッチャーが観察を続けていましたが、クマタカは西方はるかに見える稜線から飛び立ちました。そして周辺の山々を悠然と飛び、時にはノスリなどと絡み合いながら、我々が見守る山頂広場上空の至近距離をゆったりと旋回してくれたのです。時折、非常に幅の広い翼を大きく羽ばたき、鮮やかな羽斑をくっきりと際立たせ、見ている者を存分に魅了させてくれました。

さらにクマタカは東方へ飛び、彼方の山中へ降りたのでした。この間の数分間は、まさに至福のひとつときでした。この時の印象を詠みました。

クマタカの 白き翼は かがやけり  
測量山の 行き合ひの空

札幌市中央区 白田 正



クマタカ 2021.10.2 白田 正さん撮影

**野 幌 森 林 公 園**  
2021. 11. 7

曇り時々小雨の天候で鳥の動きは少なかつたものの、クマガゲラをはじめオオアカゲラ、ヤマゲラなどキツツキ類5種が姿を見せました。さらに樹洞で休むフクロウを参加者全員でじっくりと観察することができました。

【記録された鳥】 マガモ、コガモ、キンクロハジロ、カイツブリ、オオバン、フクロウ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、クマガゲラ、ヤマゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ゴジュウカラ、ツグミ、カシラダカ 以上20種



フクロウ 藤吉 功さん撮影

【参加者】 渋谷公之、高坂真由子、田守真一・敦子、道場 優、長尾由美子、畑 正輔、早坂泰夫、藤吉 功、辺見敦子、松原寛直・敏子、南 貴和子、本杉政司・朋子、横山加奈子 以上16名

【担当幹事】 道場 優、早坂泰夫



1月23日の小樽港探鳥会は、新型コロナウイルス感染症の感染防止対策に見合う参加費の価格設定が難しく中止といたします。ほかの探鳥会は実施予定ですが、新型コロナウイルス感染症の状況で中止の可能性があります。中止の告知は

当会ホームページに前日夜までに掲載しますので、確認をお願いします。

【野幌森林公園】2022年2月6日(日)

冬の野幌森林公園でキレンジャク、ツグミ、アトリ、マヒワなどの冬鳥、キツツキ類、カラ類などを観察します。正午頃に大沢口に戻り、鳥合わせをして解散となります。

集 合：野幌森林公園大沢口 9:00

交 通：JRバス 新札幌駅発（文京台循環線）

「文京台南町」下車 徒歩10分

【円山公園】2022年3月6日(日)

春間近の円山公園で、アカゲラやコゲラなどのキツツキ類、シジュウカラなどのカラ類に加え、ツグミ、マヒワ、ウソ、シメなどを観察します。パークセンター前で鳥合わせをして午前中で解散となります。

集 合：円山公園パークセンター前 9:00

交 通：地下鉄東西線円山駅下車 徒歩5分

【ウトナイ湖】2022年3月20日(日)

北の繁殖地に渡っていく、ガン・カモ類やオジロワシ、オオワシなどを観察します。湖畔をネイチャーセンターまで歩きます。正午頃ネイチャーセンターの駐車場で鳥合わせをして解散となります。

集 合：ウトナイ湖鳥獣保護センター前 9:30

交 通：道南バス 新千歳空港発（苫小牧行）

「ウトナイ湖」下車 徒歩5分

☆雨具、観察用具筆記用具などお持ちください。

☆悪天候で中止の場合があります。

☆問い合わせ 北海道自然保護協会 011-876-8546

10:00~16:00 (土日、祝日を除く)

## 鳥民だより

### ◆50周年記念事業の終了について◆

50周年記念事業は、会員をはじめとする関係各位のご協力ですでに50周年記念誌の刊行と、記録データベースの作成が終了しています。

これ以外に計画した記念式典、記念講演会、記念探鳥会については時節柄実施を断念し、これをもって50周年記念事業は終了といたします。

なお、特別会計はそのまま存続させ、一般会計不足時の財源として活用することといたします。

### ◆新年講演会の中止について◆

新年講演会は引き続き、中止いたします。

### ◆事務所移転について◆

前号でお知らせしたとおり10月18日に事務所の移転を完了しました。新住所と電話番号はこのページの下段・奥付をご覧ください。

### 【新しく会員になられた方々】

大和田将史 (名寄市)

葛西 文彦 (札幌市白石区)

秋元 義治 (札幌市清田区)

小笠原未来 (札幌市清田区)

福士 一徳 (札幌市厚別区)

### 表紙の鳥

### オオチドリ



5月22日、3人で石狩浜（石狩市）の陸側の草地～湿地で、ハマシギ、トウネン、長期逗留しているアカエリヒレアシシギ1羽を観察していました。

午後4時過ぎに草地側に沿って見慣れない鳥1羽を肉眼で確認。50m以上距離があり、コモンシギみtainな風貌ですが、見たことのない、体全体がツルっとしています。少しずつ近づきましたが、警戒心が強いらしく、小走りで草地の中を止まっては走り、止まっては走り、この間1～2分ほどで、小樽側へ足早く立ち去りました。

図鑑などでオオチドリと識別しましたが、正確を期するために北大の先崎理之さん（当会幹事）、山階鳥類研究所に照会したところ、北海道ではあまり観察例のないオオチドリの雌であることが確認できました。巡り合えたことに感激し、いままでたくさんの鳥を観察し写真を撮ってきたことへのご褒美と受け止めました。

田中 陽 (札幌市北区)

【北海道野鳥愛護会】年会費 個人 2,000 円、家族 3,000 円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒003-0026 札幌市白石区本通1丁目南2-38 北海道自然保護協会気付 北海道野鳥愛護会 ☎(011)876-8546

HPのアドレス <https://aigokai.org>